

発信力育成のために —lexical phrases を中心として—

加藤治之



発信のための文法力を構成する要素には、次の2つが含まれると思います。

1. 各文法事項が、何を表現したいときにどう用いられるかを知っていて、実際に使える。
2. 各文法事項を含む慣用表現を知っていて、実際に使える。

本稿では、『ジーニアス総合英語』（以下『G総合』）が上記2点をどのように扱っているかについて、関係詞を題材にして述べることにします。

1. について

発信に役立つためには、関係詞を次のように理解しておく必要があります。

ある名詞について節の形で具体的に説明したいときに用い、その名詞（＝先行詞）の後に置いて説明部分につなげる。

説明したい名詞→**関係詞**→説明部分
(先行詞) 節

(注) what, how, 複合関係詞など自由関係詞は別の捉え方が必要ですが、ここでは割愛します。

たとえば、「私にはアメリカ映画のことをよく知っている友人がいます」（『G総合』p.294）と言いたいときは、次のような思考の流れで英文を産出することになります。

a friend → どんな友人かという → **who** knows

a lot about American movies

かなり古い本になりますが、林語堂 (Lin Yutang) は『開明英文文法—表現の科学—』（1960、文建書房）で、母語（＝中国語）であることを表現したいとき英語ではどう表現するか、という母語→英語のアプローチをとりました。発信のための文法学習にはこれが非常に重要です。

この点、I have a friend. He [She] knows a lot about American movies.と2文を示し、共通の語句 a friend と He [She]に着目させ、2文をつなげる…という手順で関係詞を導入するのは、「はじめに英語ありき」の発想で、発信のための手法とは言えないでしょう。

2. について

関係詞 what に焦点を当て、冒頭で述べた「慣用表現」を次の3種類に分けて考えてみます。

① 成句として定着していて、文法知識に基づいて理解できるもの：

- (1) what is called
- (2) what S was [what S used to be]

これらは、関係代名詞 what の基本的知識に基づいてその意味を理解することができます。成句だからといって理屈抜きに覚えるのではなく、できる範囲で論理的に把握しようとする姿勢は、定着を促すために重要なことです。

② そのまま覚えてしまったほうがいいもの：

- (3) what with A and (what with) B
- (4) what (few [little]) ～

これらは、関係代名詞 what を用いた慣用表現

の中で提示されることが多いですが、(3)の what は、現在では partly の意味の副詞（歴史的には不定代名詞 something の副詞的対格）であり、(4)の what は関係形容詞です。そのまま受け入れた方が手取り早いでしょう。

なお、(2)と(3)について、『G 総合』には次のような発信のために有用な説明があります。ジーニアス英和辞典とのコラボの成果の一つです。

(2) what S was [what S used to be]

能力・外見などの点で現在の S と過去の S を比較するときに使う。悪い方に変わったことを表す場合が多い。(p. 320)

(3) what with A and (what with) B

文頭で使われ、好ましくない理由を表すのがふつう。(p. 321)

第3の慣用表現は、少し詳しく述べます。

③成句と呼べるほどではないものの、母語話者にとって自然な決まり文句：

(5) I'll do what I can. 「できるだけことはしてみます」→結果は保証しないことを含意

(6) She's got what it takes to be a leader. 「彼女は人の上に立つ器だ」→ what it takes to V で「V するために必要なもの(資質・才能など)」

日常的な場面では、ネイティブスピーカーは文法規則に語を充填して文を創造しているのではなく、何万という ready-made memorized combination を繰り返し用いているか、一部を変化させて用いているにすぎない、というのがコーパス言語学の知見であり、(5)は文全体が慣用表現である例、(6)は文の一部が交換可能 (what it takes to が固定部分) な例です。

田崎 (1990) は、上記のような表現を linguistic blocks と呼び、こうした表現のカリキュラム化による「会話文法」の確立が、発話のほとんど全部を構造的に（つまり文法のルールに従って）組み立てなければならない日本人にとって大いに役立つ、と述べています（『英語会話教育理論』（大修館書店、pp. 122-123））。

『G 総合』はこの点に着目し、「上手に使いたい what」というコラムを設け、③に属する慣用表現を取り上げています。そこに登場する表現の中の3つは、実は、次の英作文問題を下敷きにしました（下線部は解答すべき箇所の一部）。

1. 高校生の時、テスト期間で早く帰宅した私は、「今日の物理のテストはね、予想した問題が全然出なかったの。せっかく勉強して行ったのに損しちゃった。」(中略) 父は本から顔を上げずに、「勉強というものは、そんなものじゃないだろう」とひと言だけ言った。

(神戸大学 2000年度)

2. わたしは、家具や道具はなるべく木の素材を選んでいきます。(中略) 木は新品の時が発点です。年月に磨かれて、味わいも美しさも増していく。そこが一番の魅力です。

(京都大学 2004年度)

1. を You shouldn't study like that., 2. を That is the most attractive aspect of wood. としても合格点はもらえるでしょうが、次のような慣用表現を用いて表現することができます。

1. That's not what studying should be.

(what S should be 「S のあるべき姿」)

That's not what studying is (all) about.

(what S is (all) about 「S の本質、真髄」)

2. That is what I like best about wood.

(what S like best about ~ 「S が~に関して最も気に入っていること→S にとって~の最大の魅力」)

このような lexical phrases の最大のメリットは、それが pre-assembled であるがゆえに、いったん学習され定着すると、流ちょうな会話の構築に非常に貢献するということです。英語の自然さという点でも大きな意味があります。発信のための文法学習を行う上で、今後もっと注目されてよいのではないのでしょうか。

(かとう はるゆき・京都府立嵯峨野高等学校非常勤講師)